

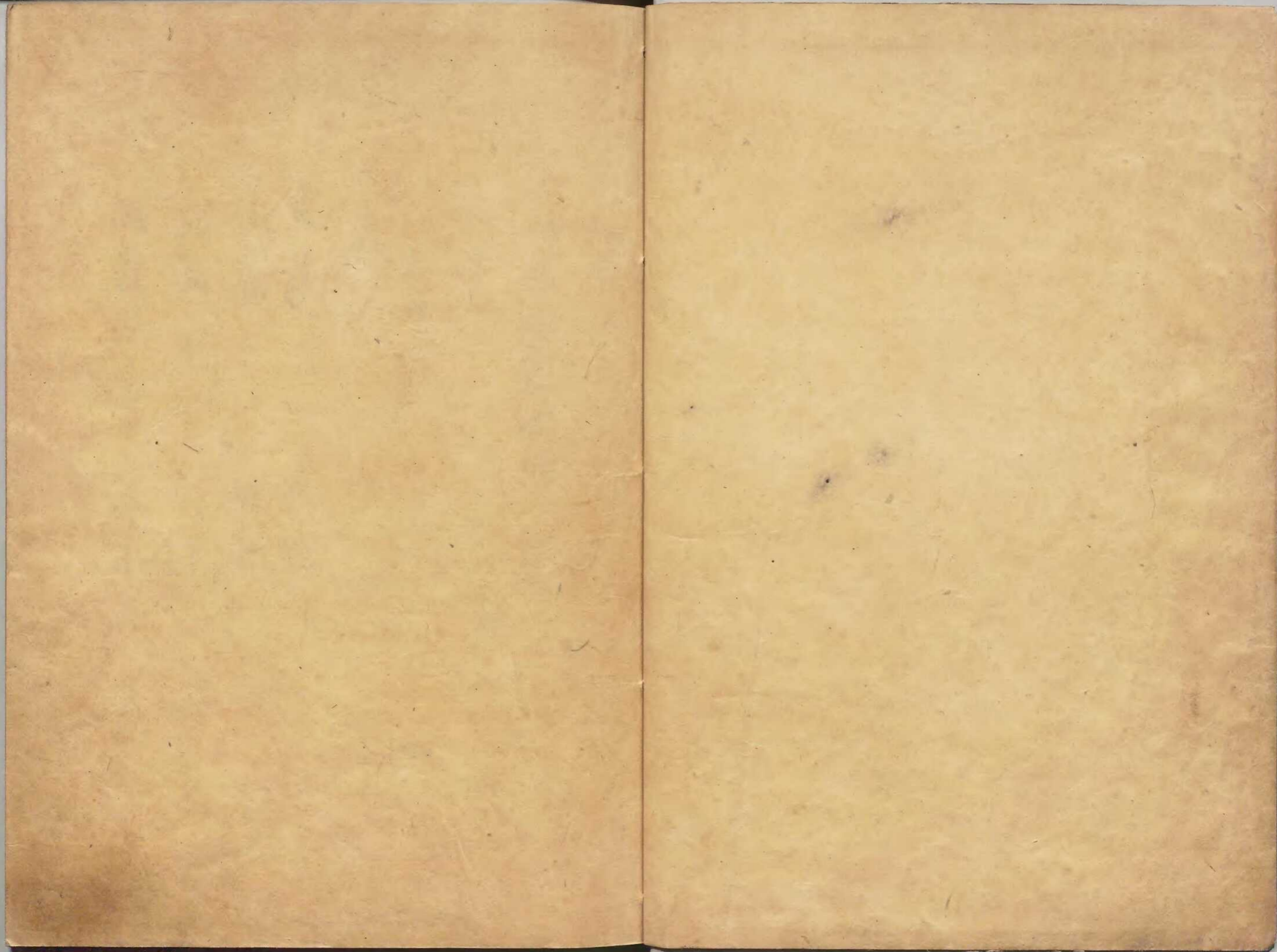
寛永諸家譜

藤原氏
方郷流

冊之八

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186(94)		
函號	和	76	1





新店
池田
茂藤
中鴻
森

長谷川
河村
平林
中野

寛永諸家系圖傳

藤原氏

丙八小家

秀郷流
新店

淺草文庫

秀郷ひて

後四位下

茂茂守

鎮守府將軍

母下野攝麻鳩女始和河田原了

何寸家故よ田原友太と号以後

不改之儀乃字とと

千晴り

下野守

千圓くま

長祿守

千種しゅ

上野介或る千時とと

千明あき

千清きよ

相換守

左馬助 將軍右衛門

千常とと

常陸介

千方とと

修理左衛門

頼清より

奥平おくのへ 頼清

頼俊より

左近さきん 頼俊

行後

内藤保仗

後成

足立之郎

季後

藤右馬允と号す

或説行後弟

季方

腰湫口

共頭湫口

季家

次郎湫口

後季

三郎太史 以時初く河内其浦に絶と

惟季

牛飼藤太史

後宗

水太史 修理亮

後成うしろなり

堀藤太ほりとうだ

後正うしろただ

藤二 永右衛門ふじに ながえもん

後安うしろやす

永三郎 永右衛門ながさぶろう ながえもん

後平うしろひら

永八郎 永右衛門ながはちろう ながえもん

後経うしろつとむ

永五郎 弾田ながごろう だんた

後景うしろかげ

永十郎

後綱うしろつな

今井九郎 進士入道 以時始いまいぬらう しのぶ いたし

今井小伝 法名組園いまいこでん ほうなむぐり

後行

今郎在東門入道 法名行蓮いまらう とうもん に入道 ほうなむ ぎょうれん

末綱すゑつな

五郎入道

資綱すけつな

六郎入道
法名參阿さんあ

宗俊むねとし

藤六左衛門

遠俊とほとし

六郎左衛門
法名西阿さいあ

胤俊むすし

六郎左衛門
遠江守
法名淨西じやうさい

俊石とし

民部丞
法名堯阿けいあ始々新庄しんじやう後のち

正俊ただとし

新庄しんじやう又六郎左衛門

高俊たかひこ

六郎左衛門大進 越中守 法名 圓常えんじょう

秀遠ひでと

六郎左衛門尉 法名 彦西ひこせい

詮遠せんえん

権六 義濃守

光遠みつえん

越中守 法名 專西せんせい

齊金論師さいきんろんし

某

信濃入道 法名 教西けうせい 中西相續なかつちゅうしゆく

遠明とんめい

肥前守 中小なかつちゅう 号 止と

惠呈海師

某

大郎左衛門尉

新店相續

照長論師

遠久

友六左衛門尉

向と号と

女子

堀老母

舞

淨蓮寺

女子

小足老母

高遠

養濃守 法名園西

季遠

備中守 法名成弁

清遠きよと

左衛門尉

法名長西ながにし

女子

新店興之母

某

藤七ふじなな文部ぶんぶ合あ我われ乃なり時とき討うち死し

女子

多おほ増ぞう

宗印そういん

刑部卿

女子

八木やま

女子

小足

直後ちかご

新店將監しやうげん

某

新店右衛門右衛門

左衛門作

直昌

為人 生國月前 童名又丸

城を坂田郡 胡妻よりとく 居泊す

天文十八の二月之好 筑前守長多 持

列より 兵を河く 於時直昌 細川右京

大史晴えり ちりき ちりき 持列よ

しり長多と ちりき 教度軍功と

ちりきと 六月十二日 江口より 村

わく 我死し 於時 郎 後 十二人

一所 少く 亦死 法名 源三

直頼

後河守 後位下 宮内卿 兼 生國

同前 胡妻乃 城より 領す

は 筑豊 佐 秀吉 ちりき 領す

天正 乃 ちりき 秀吉 命よ 領す

持列 山崎 乃 城より 領す

天正 十一の 月 柴田 合戦 乃 時

松原吉郎左衛門尉家次と同一く河内
坂中此城をもち其後淺野彈正彌
長政に同く大津の城をうつり
居てついで大津の城に在りて
直定ふたまふりて文禄三年もく
大津の城主なり
文禄三年十月大津をとりたためし
和州宇田の城をうつり豊後守持列
高槻の城をうつり

慶長三年秀吉薨逝乃後秀頼よ
傳ふ

東照大権現よりわ直頼の質直なり
事と志ありてわ恩恵たり
おとせり
月みちと松原勝じりんと
大権現の移居御遷治より下野よ
御教向志終ふ時より高橋部少輔之成
上方より乱をおこすよりわ

大権現おほごんげん小山おのやまよりゆりよとて坂たよりひく

之成なりを誅つと罰ばつ志こころをいひ歎なげ息いきおとく

くおかりゆたふ直頼なほたねをよひ

直定なほさだ此沖陣このうきじんよ信奉のぶたうとていふと

明あきらく忠義ちゅうぎをいりりく二心ふたこころなり

改陣かきじん乃後のち

大権現おほごんげん蒲生ふまふ勢せい孫まごも秀行ひでゆき小こ 信のぶけり

新庄しんじょう又また子こ今度いまど我場わがばよまじつ

とくよむじつ乃のりよとて

源志げんし乃者のぢやあり秀行ひでゆきと新庄しんじょうと河全かぜん

乃のちかよあまは會津あいつづへ相具あひぐく居

住すませし先まへよの物命ものいのちよもわ

7 乃のちく住すまむ

同九年正月十五日父子ちちこを小こ 百ひゃく市し

乃のちく後府ごふよもわ

大権現おほごんげん小湯こたうよもわ

台徳院たいとくゐん殿のり小湯こたうよもわ

久ひさも時ときよ恩賜おんたまあり

時と津取とあり乃流とありとくは
られぬ時と諸大名は館へ津成乃
時津相傳よ然とありとあり

同十二年十二月二十六日又内卿

法中より任じらる

大権現津鷹持とありと武列河越よ

おと津成乃時直頼信忠と直頼

石小つとつと湯見とあり信忠

下総國海上より一人乃徳とあり其

あつらふせすがめと物成のり

事なりとあり財利をいひ

と一乃軌單を軒ふりてとあり

人乃をくも物とありとあり

食とあり軌單乃らじま

とありとあり食物なりとあり

とありとありとありとあり

あつらふせふと好家乃若とあり

又直昌と信年持列江はれ

戰場よ

く討死す其合戦乃事彼者よく
志を尽しかんら海とよびて死
よあつて其時乃事を録せり
来りて此物命よりて自彰海
とよびて彼隠者乃任事よりて
みせ及う七十得の常門は記録を
論志をなせり名を忠臣居士と
いひたり自彰乃面世んとよびて
すかんら菴室乃因よびて物語

時わ川と其間よ江口合戦乃事
をこりて新店とよ人の戦死
再よ家来の者首級ありて実持
しるしをよ自彰洞らみくい
其新店とよふ志ある父自昌と
よふありて居士是とよりて業を
拍く撃歎と自頼なることあり
まわ居士が姓氏をよひけしよ更
ふいす自頼又同くいし其合戦

乃時金の幣をとりて諸段を下
せし民者ありとてさぐるは誰人
我や居士とて其なりと云く
終小姓氏をこころす車彩川越よ
海く出りて言上りけり
大権現とかけし沖感ありけり
同十七の十二月十九日卒寸歳七十五
法名嚴珊

直忠

刑部左衛門尉 東玉と号し生息弱
はぐめ秀吉ふつふ時よ河内淡路郡
蒲生郡堺別安濃郡の田あり
地二子七百石解と修と
慶長二年秀吉地界乃後直忠病
氣よ依て京都に閑居と
同十九年大坂兵乱乃時
大権現中女と我分成就準人正妻友節乃
小命とて東玉を 石布とて修を

書を板倉伊吹守より下は是の
依く大坂の頼よしき臣吉久
大権現の湯一も其奉書い
ふまは取持と

元和二年

台徳院殿沖上洛還沖乃時河内栢原
乃沖殿小たわく酒肴を献じ時
栢原乃沖殿を直忠形り与給依り

直氏

吉原 生園山城

慶長十九年元和元年大坂の役
乃沖陣の時直定小居く軍
を遣ふし又月七日天皇御所へ
おわく甲首一級討たすから酒
井雅永頭忠世より

台徳院殿上洛小達せ給

元和元年七月朔日

台德院殿小幡たか一巻

同六年東玉死去乃後杉柘しんせき

御殿ごてんをあげりり巻

同九年寛永三年女度にょどの空所

還かへり御ご乃の時柘原御殿しんげんごてん一いっにあり

酒肴しゅげんと献けんと

寛永九年九月十七日

病死びやく

十一歳 法名ほふな見盛けんせい

直眞ちかまこと

与五右衛門 生國山城

寛永十二年十二月二十一日

將軍家しやうぐんけの湯ゆ一いっ巻まき松平まつだいら總すん殿てん助すけ紹しやう

属ぞく一いっ巻まき御ご湯ゆ一いっ巻まき

直孝ちかたか

利き髮はつ志し一いっ巻まき新あらた法ほふと号ごうと

女子

女子

直定

越前守 後五位下 生國同前

秀吉あそのあそ子あそ頼あそ房あそ

安永九年正月十五日父直頼と

相好く

大権現

台座院殿の湯にそま川流

同十九年大坂陣の時酒井雄永が

忠世ちよ継つぐ小列せうの軍に台命

を仰りありく松平安房守と同く

今里に附城を守り

元和元年大坂陣の時父又忠世継

りありく陣を天皇の御前小張の月

七日台戦乃時城中にをめ入るあり

くひし直定り家乃若り二好
七島場の日夏み高米千根孫志
白井清重人打死首級立つ家
乃手小切り
同二年 釣命小依く参者高成つ
とむ此時 信小いく新居る始終心
を刻りしして忠信なる若ありと
守人はを面自とす

元和元年四月廿一日卒 年五十七

信名子忠

直綱

右邊 生國河

孝文長三年

大権現伏見あく直頼の宅へ渡御の
こき兄直定とたけく湯見
予くま川

月五年

大権現乃釣命小依く父直頼あよ

貞定と同く蒲生純謀と秀行
一属しゆ一属しゆ會津あいつに居ゐる

同九年

人権現乃 石小依い之新店父子會津
より後府小野の心こく時ときは秀行ひでゆき領りやうに
依よ之し車くるま綱つな一人ひとり會津小野あいつののより
同十九年元和元年大坂夏度乃
沖陣おき乃時蒲生下野守忠郷しん
約命やくめいを以もつりありて是れ沖守

守之依しゆ一属しゆ之忠郷しん一属しゆ之
寛永十年六月十九日 石小依い之
將軍家しやうぐんに賜たまひ 七多しちた領りやう

同十一年十二月廿日甲列乃う代
了りやう之番地千石を好領こうりやうに
同十二年日光 沖參詣おきまげに侍奉ぶかと
侍しやう心しん

同十四年 上使かみしやうよりて薩摩國さつまのくに小
野の心しん

同十七年神岡付のりとて播州内粟のり

了いり

同十九年正月廿八日死去 歳五十八

法名宗珊のり

直方のり

興之右衛門 奥河會津より

寛永十一年正月廿二日

將軍家より賜のりなり

同十二年六月二十六日神小姓組のり

番頭のり

同十九年十一月十日直綱のり

千石を賜のりなり

秀信のり

堀岡のり 堀石見守孝村のりの養子のり

新店堀 今井のり元来同族のり

依のりり其家のりを継子のりなり

之家のり乃のりられ子孫のりなり

たゞひ其家督を相續と

直房

義興与 臣又臣下 生國河

慶長三年

大権現伏見少く忠頼宅へ渡御

乃時直房河めく

大権現一湯もあすから

御前よおわく奉國免乃御脇指

お取と其御脇指今よ是と取指と

同十一年

台徳院殿一湯一くま川

直頼死去乃後 信よ依く忠頼

り弟地乃ら之子石を信と

同十八年

台徳院殿一湯一くま川

同十九年大坂乱乃時兄直定と

甲く今里の付城と守く軍

事なつて

元和元年大坂再乱乃時酒井雅宗以
陽中（陽中）小屬（小屬）之且月七日此合戦（合戦）
城中（城中）（家入（家入）正門乃此少く首級（首級）
獲（獲）り其後天皇乃其臺（臺）より
台徳院殿（台徳院殿）より賜（賜）りてり

同八年

將軍家よりつゝてり

寛永七年 信（信）之依（依）て補宗川御
殿（殿）乃御作事（御作事）奉行（奉行）とてり

同年十二月廿九日 鈞命（鈞命）より依（依）て

後之位下り叙（叙）せり

同九年 信（信）之依（依）て御使（御使）兼（兼）たり

同年十一月御同付（御同付）此役（此役）と 信（信）之依（依）て

同十年十二月廿六日甲列（甲列）山梨郡（山梨郡）に

加信（加信）千石を賜（賜）り

同十二年九月十日 台命（台命）と兼（兼）て

御書院（御書院）兼（兼）此頭（此頭）と叙（叙）け後（後）の御（御）ひ

上使（上使）とて尾張紀伊（尾張紀伊）を治（治）せり

の如ひに組中乃輩をひきまゝに
後府に沖城番の侍心じりく
是と志保す

直長 なほ

文周 武列 江戸へ生れ

寛永九年八月十五日

將軍家より賜へる御札

直時 なほ

伊織 生玉 直長より御札

寛永十六年二月六日

將軍家より賜へる御札

同二十年六月 侍心じりく

番の侍心

女子

女子

直好 なほ

越前守 没位下 山城守伏見より

慶長十二年

台徳院殿より賜書あり

同十九年元和元年大坂の役乃

御陣乃時又直定と同一く軍事

を侍らむ

元和元年十二月

台徳院殿乃

釣命えいめいより倭國没位下に叙

同日奉

台命えいめいよりありて直定より

家督を継ぐ

將軍家より侍らむ

同八年

台徳院殿日光

沖系えいけい乃時下野國

石橋いしがし小石乃御指を献じ時より

御羽織御袴あきあき多御儀と其比石

橋ハ直好より承りし御儀と其比石

同年十一月

台德院殿主井大炊頭利勝よ 侍け

え直好の御代野村石橋え遠く常

列乃中候を命じてより直好

一和りて知りて母を御侍

取置ふより下ご 御命より

て石橋のき方石橋ありし者列

古浦ありし石橋をい

將軍あしはるるるるるるる

此より大坂乃沖城をいひこ

乃城番江戸の沖門をいひ

家元家元沖門の沖門をいひ

教度其役をいひあはれい

信使来朝乃時林宗川家より

還し小龍乞

直好常列乃より小ねあ

七千二百石を命じて元来

とつとつとつとつとつとつ

配分と

足利尊氏卿沖判りすより之
母衣先祖よりつていりて今
是と取物と

直之

因近武列信戸より

元和二年二月始

台德院殿より湯

同六年十一月

將軍家より湯

寛永三年二月

台德院殿より御命小依

つて

同丁丑年八月

將軍家より信小依

普清を名取寸沙普清場

乃時 石が

上意より

同十六日七月十二日沖前へ百石礼
小姓組乃陽頭へ礼
同十七年正月六日沖前へ百石礼
印祓を以て

直治

内藏助武列 江戸小生
寛永十一年 始
將軍家小湯 奉
同十二年 始
小生

乃沖前へ

女子

女子

直常

新之助 武列 江戸小生
寛永六年 十一月
將軍家小湯 奉

家紋いへもん

尾藤巴おいつちのへ

或橋あるはし

上羽蝶かみうぶてつ

菱葉いしのくさ

夕形ゆふがた新あらた山やま用もちくく只ただ紋もんととす

長谷川 えせがわ

● 公清 秀郷ありあ代

左衛門尉

作藤と号と

公澄 すし

左衛門尉

帯刀大史

左衛門尉

知基 ちもと

近江位下

左京少進 さきやうのせうじん

準人正 じゆんじんのせい

知昌 ちまさ

近江位下

尾張守 おわりのも

知忠 ちただ

近江位下

尾張守

玄蕃人 げんぱんのひと

知宗 ちむね

左京

季康 すねやす

左京尉

宗季 むねすけ

左衛門尉

宗遠 ひこのちか

武者所

有経 ありのちか

多満守 たみのまもり

宗經 ひこのちか

宗兼 ひこのちか

宗康 ひこのちか

宗継 ひこのちか

左衛門尉

左衛門尉

右衛門尉

宗重 ひこのちか

刑部丞 たけふのちか

左衛門尉

神長谷川 かみながのちか

少輔 すけ
少輔 すけ
少輔 すけ

宗的 ひこのちか

源之部

名祖大和 なむとのおおわ
大和 おほわ
大和 おほわ

宗仁 ひこのちか

源之部

生國山城 なみのりやま

天正十一年二月後五位下より叙せ
り刑部卿に任ぜり叙せ

慶長五年

東照大権現より侍りし御所

同十一年二月九日六十八歳ありて卒

す 法名深養

守 知

右兵衛尉

生國用お

天正十年正月十九日後五位下に
叙せり刑部卿に任ぜり
慶長五年

大権現より侍りし御所

同十九日大坂御陣の時ききし

後府に侍りし大坂より

その御所倉伊賀守りし

の川守知より侍りし

慶長の御所より侍りし

寄手装まきつらんよすのりぐせよ
牧度よをよびてか場をこふと
とて法軍士いもこびつすちか
疾ふねてつくせじつり
ふれりわく聖日落ふれ城り
おまじくせら

大権規沖上海のとき 修けけ海り
中流よこ後前橋なるびよ行原
町よりて襲攻りのときなり

作渡もその場を經廻らぬのう
台座院殿法乃戰場を 高徳の

とに作渡も云といていしく守知が
は寄よなるひくハ竹末百教の力よ
色もなりと道にわ 沖感あつて
沖攻陣乃後沖服羽織なるびり
黄金等公津飲正
元和元年大坂再陣り

大権規りし法を正

元和二年

大権現オホミコト夢ゆめ見み沖ナカのら後府アトノミヤより江戸エドより

とよむじよヨシノ者モノ恒トコと

寛永九年十一月二十六日ニ卒シと

歳六十日ト法名ホウナ宗澄ムネズキ

正尚マサナガ

繼ついで殿の助すけ 生な玉たま月前の前

安長九年アサナガノシよりめく

大権現オホミコトをこ誅ころ礼らいと

同十六年ドウジウジウシツノシ後府アトノミヤよりむむく河カへく

より

大坂オオサカあら度た乃の沖陣ナカノマよりち父ちち与よ知ちとおあらく

信のぶ守のりをし守もと

元和二年正月

台たい西院さいいん殿の最命さいめいとうけけ後のちよりく

沖書院ナカノシヤウインあら度た乃の信守のぶのりと

同九年

將軍家より侍之令之^{えん}は侍之御書院
妻を侍之^{えん}を^{やまひ}年ハ病^{やまひ}より^いり^く
養生^{やうじやう}也

守勝

兵助^{ひやうすけ}及之^{ひやうすけ}兵助^{ひやうすけ}とあり^し

慶長十七年^{けいぢやう}より^めく

久權^{くゑん}現^{げん}より^し

元和二年^{げんわ}

台徳院^{たいとく}殿^{でん}を^{しん}礼^{らい}

寛永十年^{かんえい}正月二十八日

將軍家^{しやうぐん}より^あた^く由^ゆ侍^し

同十年八月十日^{どうじゅうねん}より^{しん}小姓^{せうじやう}継^{ついで}乃^の
毒^{どく}を^し侍^し

尚知

小若^{せうわく}後河府^{ごがふ}中^{ちゆう}より^し

正尚^{せいしやう}が^し侍^しを^し侍^しを^し

寛永十六年^{かんえい}十月十八日^{じゅうごふ}乃^の丸^{まる}

をひくうめて

將軍家よ洋錫したるも此紙

家紋うちのいかり之波左巴又丸の内よ豊はた之川ひき

長谷川

中進藤のら友並よいころ

長谷川と称号は

有酒

進友文内が物 路列志那

じま

享正九年八月六日六十歳歿
死に 法名中 煥美堂

藤廣

長子 藤原 安徳 那 一 じま 歿
享正八年

東照大権現 一 じま 歿

同子 台命 一 じま 歿 肥前

長崎の 一 じま 歿

同十九年十二月廿二日 歿 肥前

一 じま 歿

元和二年十月廿六日 又 十歳 歿

死に 法名 秀月 盛白

廣清

左馬助 後河府中 一 じま 歿

伯母 信玄 院 養子 一 じま 歿

寛永二年十一月一日

將軍家小幡揚ふた一は子こくく海う江え江え江え
同奉沖書院敷しきとと法はとと心こ

進ま友り家か紋もん
長ち吉よ川が家か紋もん

丸まるのの月つき三さん川が
友りのの丸まる橋はし庭にわ

長谷川しせうが

正長まうさな

友九郎 後紀伊守と号す

後小川よ生 頼のら田中

后任也

々川義元没落の故

東照大権現よはくすまはる

元龜三年十二月廿二日^{せんりゅう}を^つ列^りら^る方^か
原^{はら}の^{せん}戦^{せん}場^ばに^あり^て討^う死^じに^あり^て七^{しち}歳^{さい}
法^{はふ}名^な存^{ぞん}法^{はふ}

正成^{せいせい}

執^{しやく}後^ご 生^{せい}國^{こく}後^ご河^か

九^く歳^{さい}より父^{ちち}より河^かに^あり^て

大^{だい}権^{けん}現^{げん}より食^{しょく}禄^{ろく}より海^{うみ}より又^{また}子^こを^なる

て十^{じゅう}三^{さん}乃^のと^られ^りわ

大^{だい}権^{けん}現^{げん}より河^かに^あり^てま^るり^て現^{げん}

長^{ちやう}五^ご年^{ねん}宇^う都^つ部^ぶ文^{ぶん}冲^{ちゆう}を^{せん}殺^{ころ}すの^り別^{べつ}

台^{たい}西^{せい}院^{えん}殿^{でん}より法^{はふ}名^な存^{ぞん}法^{はふ} 最^{さい}命^{めい}を

叩^{たた}き^つり^て越^{えつ}前^{ぜん}冬^{ふゆ}議^ぎ忠^{ちゆう}直^{ちやく}卿^{けい}乃^の室^{むろ}

家^かより志^しを^なす^るひ^まり^て越^{えつ}前^{ぜん}に^あり^て

あ^らわ^るく^つつ^ふ

寛^{かん}永^{えい}十^{じゅう}五^ご年^{ねん}九^く月^{げつ}二^に日^{にち}に^あり^て死^しす

七^{しち}十^{じゅう}七^{しち}歳^{さい} 法^{はふ}名^な淨^{じやう}久^{きう}

沖陣ウキに信重のぶしげを遣はし、
後河大納言忠長のぶながに命じて、
將軍家よりつとめさせしむる

寛永十五年七月に死せしむる

宣重のぶしげ

伊勢 生國なまくに氏

寛永十五年正月

將軍家よりつとめさせしむる

正吉のぶよし

讃波 生國なまくに後河

十一歳より

右徳院殿よりつとめさせしむる

寛永十二年二月七日に死せしむる

四十歳 信名のぶな氏

正信のぶのぶ

後河守 氏列のぶら氏

正者や〜なひ〜子と云ふは正成の子
なり

台漣殿ふは〜と云ふなり 教命よ

〜と云ふ家督と云ふ

寛永九年十二月廿三日辰五位下に

叙〜漣也よはと

月十六年三月八日よ卒と云ふ

法名了智

正綱

久々郎 生は同家

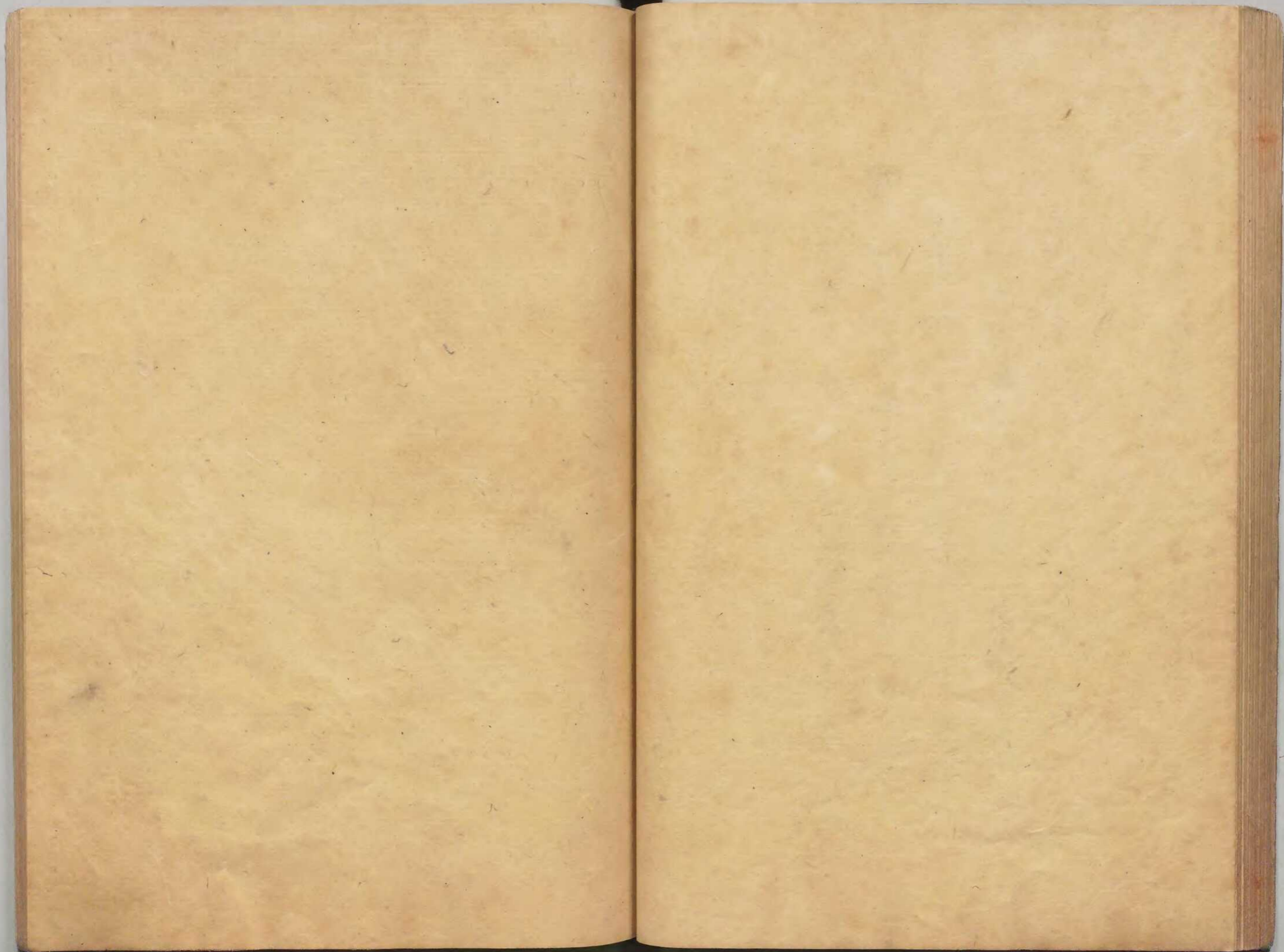
寛永十年十二月二十一日

將軍家より津陽と

月十二年正月二日よ御書院也

〜と云ふ

家紋藤巴



長谷川 えせがわ

長久 ながひさ

二郎景 じらうかげ

生國大和 なまくにわ

法名長樹 ほんながじゆ

長盛 ながさか

友兵衛 ともべゑ

生國後河 なまくにのちがは

法名長盛 ほんながさか

東照大権現 とうてうだいけんげん

生國沖入國のら河田 なまくにのちのりかた

沖城敏乃を^{せん}つよをひく^{せん}沖代宿禰を
はもむ

長親 ^{ながちか}

友右衛門 生國月お 法名長白 ^{ながしろく}

大権現ふはくくそまうり沖代宿禰と
はもむしうわら紀伊大細言頼家^{たより}
つゝ一紀別子^{きりべし}は

長勝 ^{ながかつ}

友兵衛 生國月お

長親の普子となりその女^{むすめ}は
おしり嫁と実^{まこと}は長次^{ながつぐ}の子なわ

台酒屋殿

將軍家よはくくそまうり沖代^{せん}
職^{しやく}ははる心

長次 ^{ながつぐ}

友右衛門 生國月お 法名道忠 ^{ちちのみち}

大権現おん東洋とうよう入玉いりたまのはらめめがはられ
はらめめがはられ

長重ながしげ

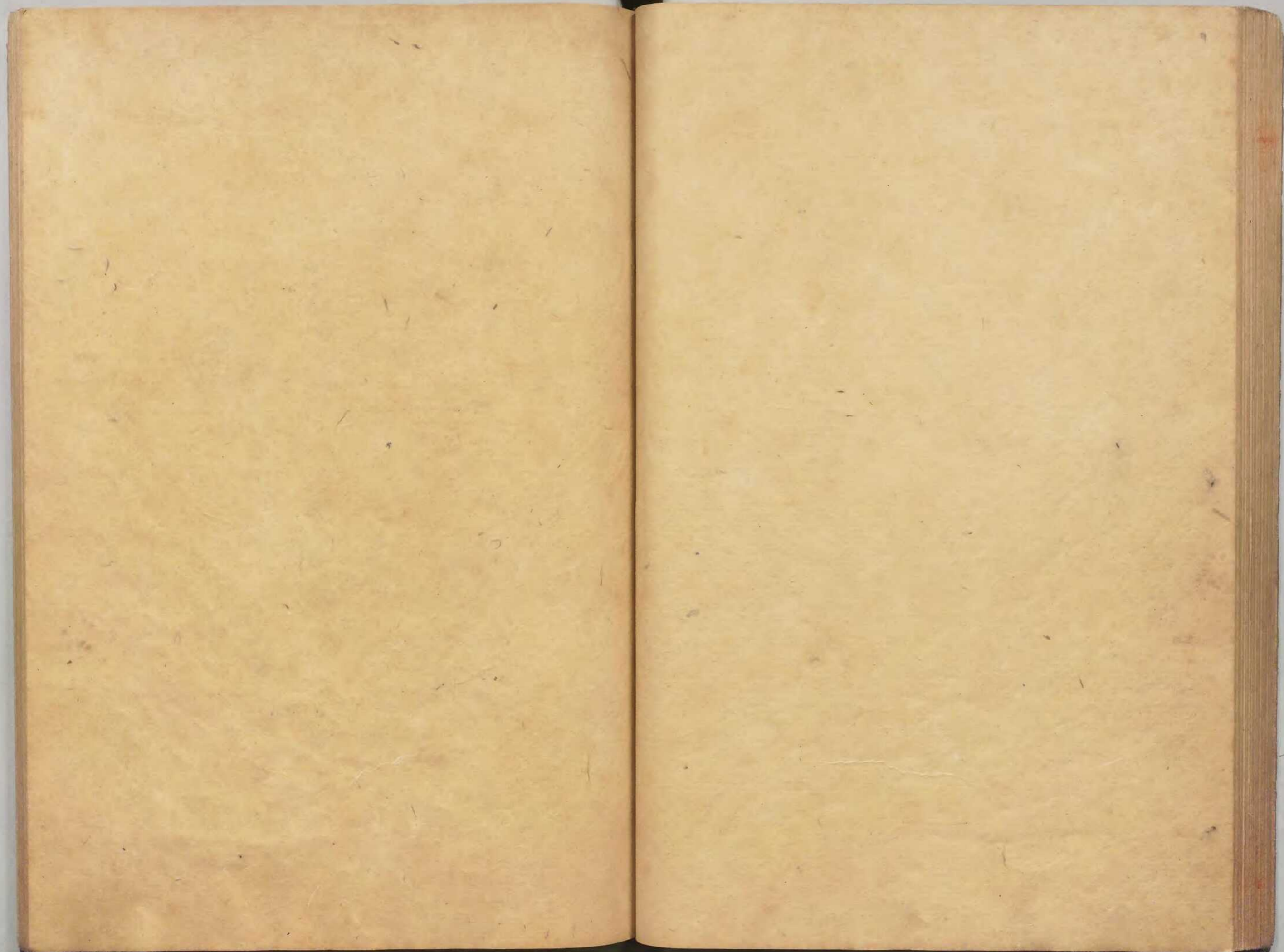
友右衛門尉 生國同前

大権現

台座院殿たいざえんのはらめめがはられ
將軍家しやうぐんけのはらめめがはられ

家紋

上友かみとものはらめめがはられ



長谷川セガハ

● 重良ムカ

助右衛門尉ムカ

生田後河ムカ

今川義元よはるふ 平二葉めく死と
法名浄春ムカ

安重 やすしげ

源左衛門尉

生國同安

今川氏志より不氏真波落のりり
氏国信玄より二十歳ありて死す
法名高庵 たかあん

安勝 やすかつ

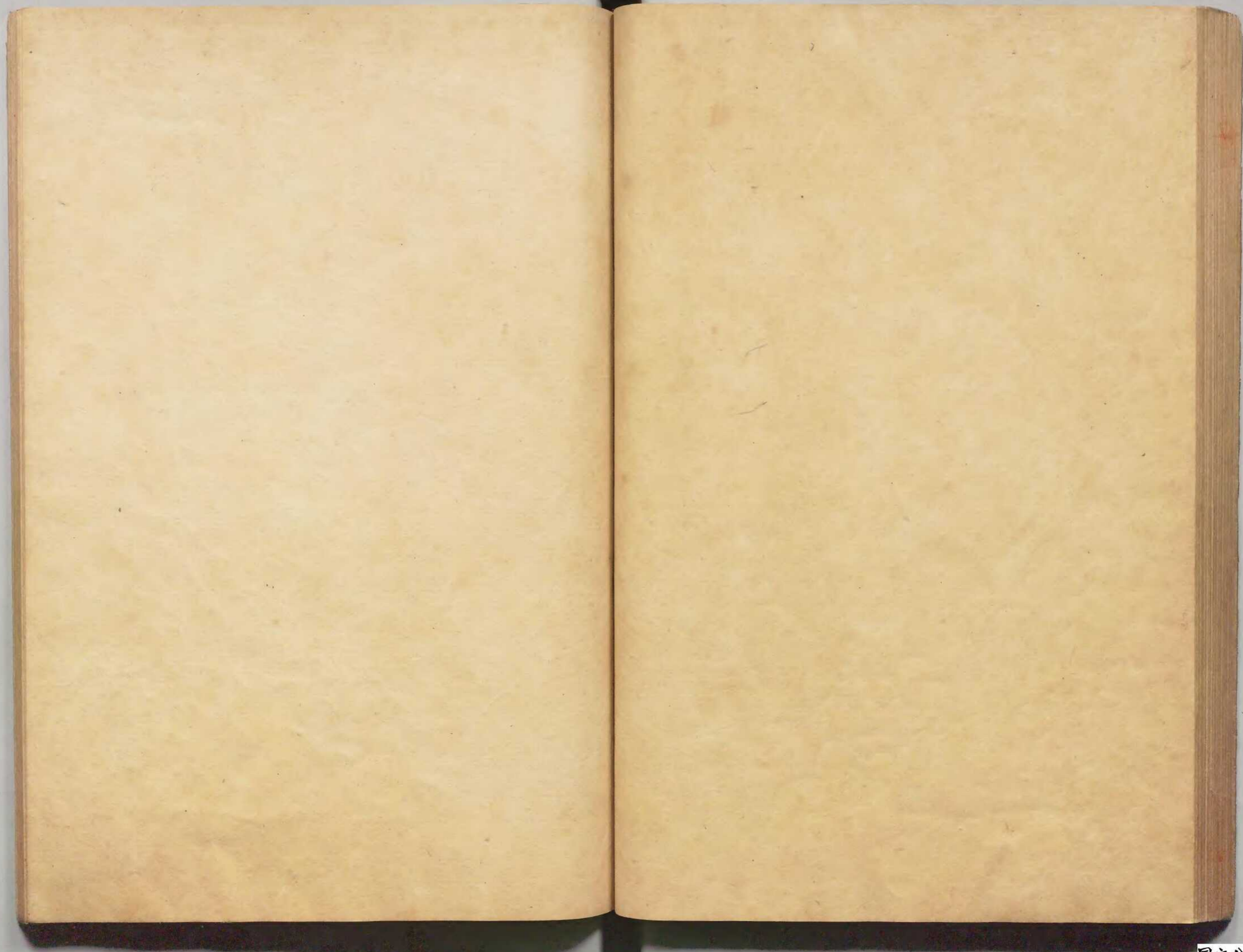
九郎左衛門尉

生國甲斐

元和九年十二月十九日

御軍家よりいささこれ いささ 聖子 せいし より
大津 おほつ 妻 つま を よ け り

家紋藤巴 ふじうら



長谷川へせがわ

● 光長みつなが

之右衛門尉

生國甲斐なまくに

法名曰夢ほりなめいむ

正清まさきよ

左衛門尉

生國長純なまくに

寛永九年かんえい

台徳院殿より
將軍殿より
御書

家紋
夜丸

● 秀元 ひでもと

大塚之河守 おほつかのこうし

生國出羽 なまくにへ

羽州秋田の城よりひそく討死 うしゅうあきたのしろよりひそくうちく

池田 いけだ

中々大塚と称して政者が代りあつた なかななかつかとせうしてせいじものがしろあつた

めく外祖父の名字を以て池田と号す めくそとぢのななをもちていけだとなが

元重 もとしげ

大塚彦次郎

生國同前

法名道祐 どうすけ

政長 まさなが

池田昌書 いけだまさあき

生國が孫

安長十七年やすながよりわらへりぬ

東照大権現よりわらへりぬ

台座院殿

將軍家よりわらへりぬ

寛永九年かんえいより死す

長好 ながよし

吉原寺

生國山城 なまのやま

台座院殿

將軍家よりわらへりぬ

城下院殿 しろした

長勝 ながかつ

七六清

寛永七年

將軍家

家紋梅輪うめぐる因

● 重政

生國三河

時秀より重政よりより系圖中絶と

累代連川の神代なり

河村

家傳よりいよく俵友右衛門十代

相列の伯人河村左衛門時秀が後胤之

重貞しげさだ

若右衛門尉 生五ノ月前

東照大権現より侍りて

重信しげのぶ

若右衛門 生四ノ月前

大権現より侍りて侍りて 侍成りたり

同心乃きの教輩をあげたり

安長十二年 五十七歳に死す

重勝しげかつ

若右衛門尉 生四ノ月前

台座院殿より侍りて侍りて

安長十九年 元和元年 大坂の度の

御陣より侍りて

元和二年

將軍家より侍りて侍りて

重次 きげり

吾七郎

生國同前

寛永十年六月朔日えん

將軍家えん

同十五年えん

家紋 包合 衣服紋車い

河村カムラ

某

昔若湯カキヤウ

法名軒ホウメイケン

重久シゲヒサ

昔次郎カキジロウ

生國後河ナマクニノカガ

中ナカ八ハチ大石ダイシタと称ナリ正マサ校マカ母ハハ方カタ此コノ禮レイ父フ乃ノ

氏を續て河村と稱す

天正
正十六年重久十二歳にて

台酒院殿小幡より

長十年に却て家を志す事と

ゆりとす

月十二年

將軍家よりて

寛永十二年六十歳にて死去す

法名玄松と

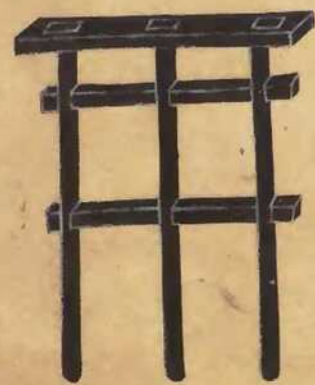
重正しげただ

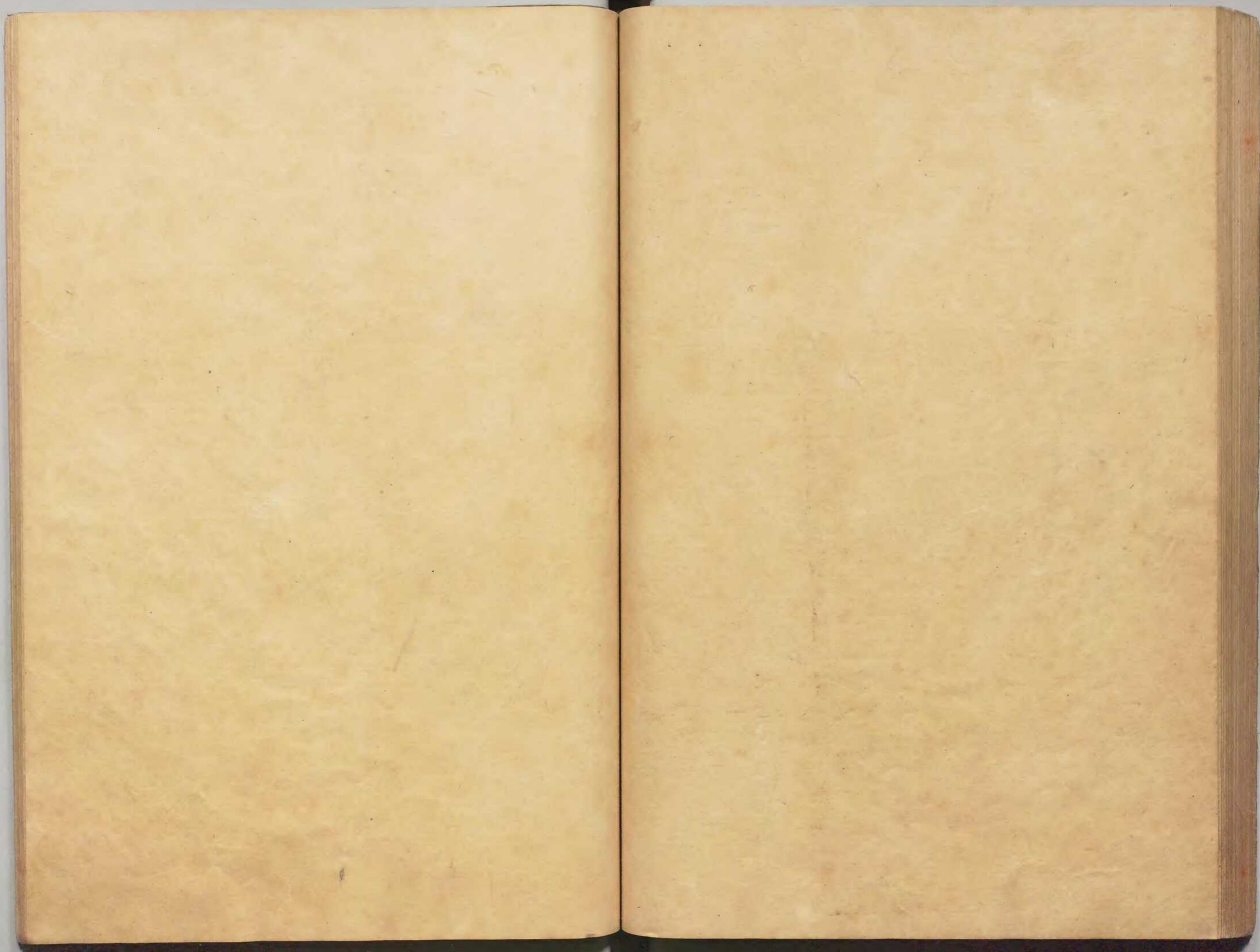
普八郎 生國長に

寛永十二年重正十六歳にて

將軍家よりて

家紋





良友りゆうゆう

● 果

彦良ひこよし 尉ゑい 生國なまくに 山城やましろ
三好みよし 修理しゆり 左ひだり 長なが 友とも 又また 下した 江え 下した

安成やすなり

理兵りへい 靖せい

生國なまくに 同前

増田右衛門尉長盛長盛は信子信子実原陣実原陣の後

东照大権現大権現よりありしはこれ信子より

河野和利和利よりとひくは信子より

御朱印あり

寛永十九年寛永十九年元和元和大坂大坂の度

御陣御陣より信子より

台徳院台徳院敵より信子より

寛永元年寛永元年六十七歳六十七歳に死す

安信やしのぶ

理兵衛りべいゑ 生國なつくに同前

寛永十五年寛永十五年よりあり

大権現大権現より賜たまははるは信子信子幼少幼少

しは信子よりとひくは信子より

大坂の御陣大坂の御陣より信子より

あり

台徳院台徳院敵

將軍將軍敵より信子より

安之

勝五郎 生五後河

寛永十二年

將軍家より津陽門月十七年よりわ

はくをくまらぬ

家紋最乃丸

● 光吉こうきち

平林ひらばやし

大兵衛おほべゑ 生國なまくに甲斐かい

武田信玄むけだのぶげんより、比叡ひゑより、を討うつ

天正てんしやう三年さん八月はつ二十一日にじゅういちにち長篠ながしの合戦あひびきの

より、比叡ひゑより、を討うつ

正廣 まさひろ

友助

東照大権現甲別沙手よ入てのら石
出さ道はく平とく甲別助
伝列川中橋合戦のと此法下乃高
名ありけと此症とく方これけり
よひて

大権現沙袋頭とてふる是人吏一人と

年毎ふうれと此乃沖目付ハ酒井
与九郎一なり

寛文六年六月死と

正次 まさつぐ

友之郎

右酒院殿小使のきとく甲別助

寛文十六年十二月二十日

廿六歳少て死と

正好

まさよし

次郎右衛門尉

生國氏苑

ひさこ

家紋松皮菱

まつかわび

某

中鴻

家傳りてん小儀たろ舊太秀ひて御ご後ご胤いん中鴻ちゅうこう大郎だいろう義ぎ
泰末やと孫也まごと称なづす

与五郎 生國尾列

永祿五年えいりくごねん織田信長おだのぶながの嫁よめと豊崎とよさき之の郎らう佐さ
康主やとへ嫁よめしなす時とき信長のぶながの命いのちより依より

尾列より三列ふいごり
東照大権現よ仕もは

果

与五郎

大権現よ仕もは

永禄十一年

大権現遠列漢松の城へうはりなふ時志
ひもまの同國高塚ふとひく
あはれ百石を

た

天正四年十月二日武田信賴後列ふ
張と時

大権現の命よ依くりの見となりを
坂本清よより兵部はうひく
相良浦よよしきあらはらひ敵の
新見見ひけく足種とけり太鼓を
大よ進みいこ戦敵このいきかひと
見くたやとくをふと教度相戦て

敵首救多ゆて終小討死と相志さる者
或は討死或は死とひふじ居若くは
法名守法

重好

与出郎

板倉国防も重好また福うりの兄なり

天正十八年

大権現園東八列と作らなむ江戸の城よ

御座の時重好十九歳少して江戸よむと

小笠原越中守とひて

大権現よお湯し多時よ食福三百俵と

たもふ

・ 安永長又年石田三成謀叛

大権現三成と謀討しを多ひ伏見の城よ

御座の時重好 釣命は家て大坂川の

御島に改め参列大崎海邊の守番と

し安永長六年より大崎よむ事は

身行をこれに倣く大濤よとて死はらす
六百石とていふ

同十二年五月朔日病死 四十二歳 法名
法登はりよ

重春ちゅうしゅん

与忠郎

元和元年大坂陣敗陣の時重春九歳と
して前吉田ふとてひて初はつめと

大権現おほごんの湯ゆに在りし時ときは治ちよといふいひ幸さい六少しうと

原権はらごん也なりが没収ぼつしゆの船あり重春とて

二好ふたご瓜うりも〜めよ板倉内膳いたくらうちぜん重昌ちゅうしやうとて

新あらたい色いろを去さいし〜幼こ少せうに〜船ふねにに事こと成なり

勤こつめめり〜これに倣ならむとて其その事こととて

之後のち年とし法はり強たかく父ちち重好ちゅうごとて没ぼつとて

六百石むっぴやく法はりとて之後のち

台徳院殿

將軍家しやうぐんけに仕つかへり

家紋 家のえん

飛甲内劔菱 まろのうらまの

申野の

● 重直しげなほ

新庄の尉 生國なまくに之河

重吉しげよし

七歳 生國なまくに河前

重直しげなほが書かけ子ことなるなり実まことハ酒さけ井い江え節ふし屋やの

貞勝まことが子なり

東照大権現

台徳院殿よりくさくさくゆつ

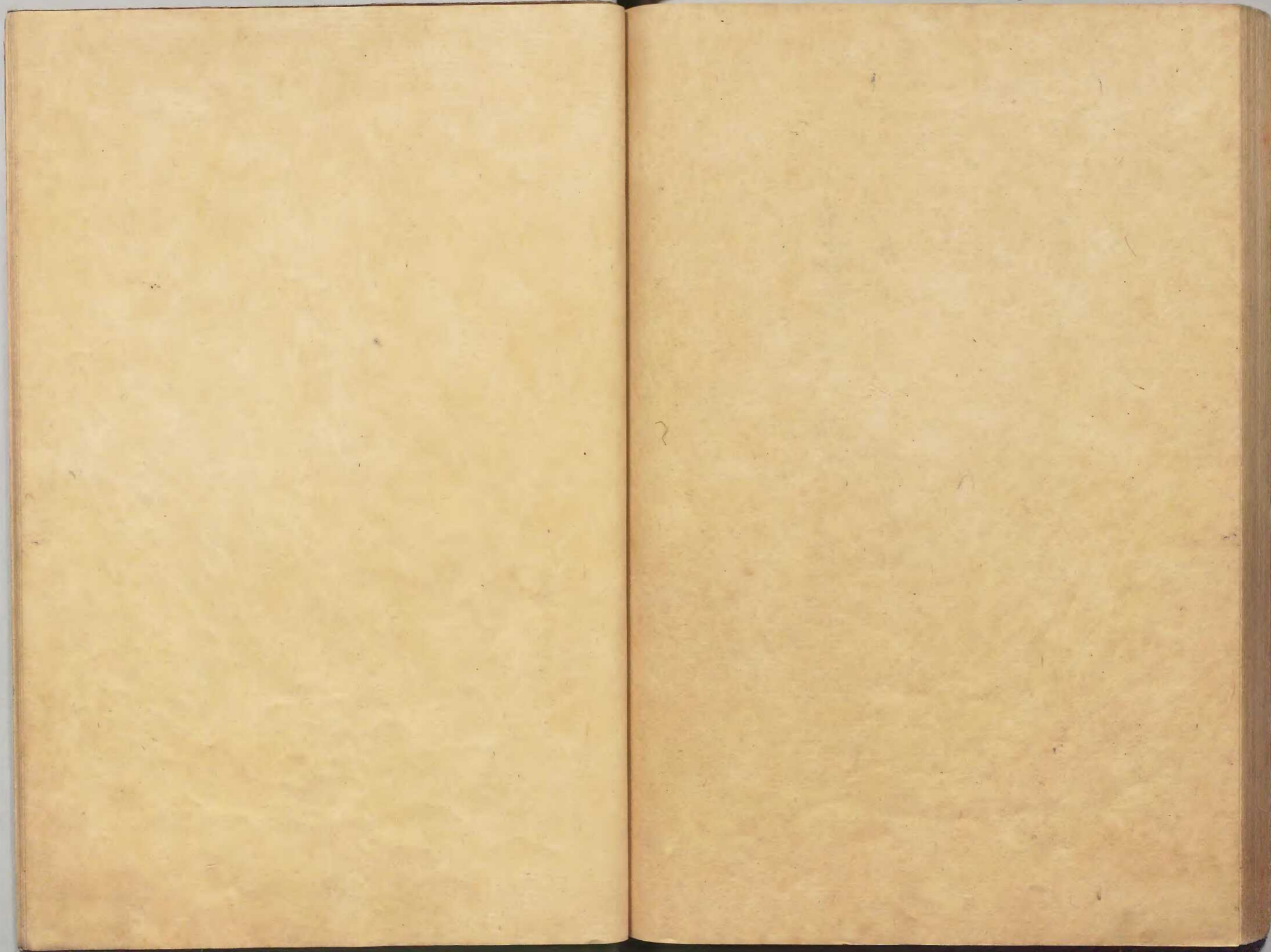
重弘しげひろ

吉兵衛尉 牛國うしくに

台徳院殿

將軍家よりつとくさくさく

家紋鳩つばき酢す草くさ



● 吉勝よしかつ

上原甚右衛門 生國軍うけくに雙ふた
武田信玄たけだのぶげんよはに 戸石乃合戦とらいしのあはれ了しま
討死うらしま 法名普禮ほうなむねらい

森もり

中なかつ上原じやうげんと称なづす

種正しゅせい

上原清海守あはらのせい 生國同前

信玄とていづれ頼朝より信ふ上野王座うづまのま

龍の城よりありとていづれ老とていづれ

返して甲州石和川より長谷と頼朝

より徳俊若許の赤甲とていづれ

今より取捨とて 信名源光のぶなげ

種長しゅちやう

森とていづれ尉 生國同前

東照大権現甲州沖入とていづれ

され同前新府沙陣の別よりいづれ

たぐもいづれいづれ時母方より名字は信

て森とていづれたぐもいづれ

台徳院殿

お軍家よりいづれいづれいづれいづれ

家紋丸乃内柏二葉折造

森

● 吉久

孫十郎 生國茂 法名西雲

吉次

元和五年 生國茂

白鹿院殿

將軍家より之書之

寛永十年病死 法名徳永

長政

徳之助 生國同前

將軍家より之書之

